百人一首抄

說文

特別
へ5
6590
172

百人一首抄

天智天皇　後撰　秋中　題しらず

秋の田のかりほの庵乃 田の稲を鳥獣にあらさ〳〵

沾 庵をつくり番しとて苫をのせ於番に めぐり

かりほの庵とつきたる三日の日 四日の日などといふたぐひなり

苫 なのつねの屋根にハふかずして苫を手にてかりそめにふきたるなり あ

らみ とハ俗にあらきといふ俗に云る 苫の編目があらきさまなし 我 俗に自分がといふ意にて身の上をさしたる今の世にも人のうへを

さしていふ方を[illegible]これなどといふ事を御[illegible] 因りますてつ苫の前ハ云ことそってといひ さしてかみ諸をされ[illegible]ふくあくるのなし

衣手 袖 ハ露にぬれつゝ てすとのふよし

一首の意ハ秋の田のかりそめ

なる番小屋の屋根の苫があらきゆへあきにあらあからぬ

かりてそのうちに番してをる我が自分の袖ハ露にぬれしまゝ

秋も暮ゝまでをるハさぞさびしくかなしからんとなすり

へ5
6590
172

持統天皇　新古今夏　題しらず

春すぎて夏来にけらし（けらしハ俗にけらしといふに及ぶ来たらしといふなり）白妙の

衣（たへとハ絹布の惣名きぬのますを云）ほすてふ（今ハきる用意に干たると云詞にて衣ほせてふハ衣ほすといふなり）天のかく山（天のかく山に衣ほしたりといふをきこしめし給ひし）一首

の心ハもはや春もすぎて夏も来るらし天のかく山に白妙

の夏衣をほして夏用意をするとみへしかやとなり此歌万葉

集にハ春過て夏来るらし白妙の衣ほしたり天のかく山と

ありかくある時ハ此白衣ハほしたる衣をほしたるをみてき

柿本人丸　拾遺恋三　題しらず

あしびきの（山の枕詞なり枕詞といふハ下の詞へいひかかる詞にて其の心ハなくいふなり）山鳥の尾の

しだり尾の（山鳥の尾ハながき中にも長き尾をいふてすぐれてながき尾あるを尾といふしだり尾とハ二つかさねて下のながきしだれたる尾をいふ下の詞へいひかからんためにしだり尾といふものなり山鳥ハ雌雄峯を隔てて寝るものなれば）ながながし

夜を（ながき夜なり）ひとりかもねん（ひとり寝んかもといふ心なり）

一首の心ハ此ながながしき夜をひとりねて過すかななげきの哀をいひあらはしたる歌なり

しかれにてひとり寝るてあるうがやひしうらめしきすむ

山辺赤人　新古今冬　題しらず

田子の浦に打出て（打出てハ奈良より出て奈良の詞のいきおひをそへんためなり上よりしものなりふりの）みれば白妙

の（さとれのふりつきるほどたくひつね）富士の高ね（富士ハ駿河国なり三日のうちより雪ふりつもりておほくふもとへやまひしてみるへしたごのうらへいでてふしの山をみれはし）に雪は

ふりつつ（みるいやましとつくしくしこのれいなのてやみなきせ）

雪ハふりつゝ　ふりつゝハふりしきる意なり　一首の意ハ春への心やそれ
かし田子の浦へうち出てみれバふじの高ねに白妙に雪ハふり
つもりたる此哥万葉集にハ田子の浦ゆうち出て見れバ真白にぞ不尽の
あへ兼出さおせしなどや打出てみれバましろにぞ不尽の高ねに雪ハ
ふりけるとあり

猿丸太夫　たゞ枕上　是貞のみこの家の哥合なりし
奥山に紅葉ふみわけ　落葉ふみゆくなり　なく鹿の
声きく時ぞ　その字力ありがたく　秋ハ悲しき　一首の
意ハ秋となりていろ〳〵の哀なる事ともあれと取分
たゞ思ひしらせしハ奥山にて紅葉をふみ分て鳴鹿の
声きく時ぞまさりてかなしく物おもはるゝと言外の意ハ
その字に深き心あり古今集にてハよみ人しらずの哥なり

中納言家持　父ハ旅人　鵲の
かさゝぎの渡せる橋　二河の渡りの合に鵲が羽をならべて天の川を渡る時の橋をいふ
におく霜の白きを見れバ夜ぞふけにける
西明に此哥ハ冬を作りて古き説ともに白きよく事を或
いとしく上ミ言ハひろく天の川をわたしていふなし　一首の意
ハ天の川なとすこぶる大空にて霜の置きたる白きをみちて
をる景色にとりや夜のふけたるをみてもあるをにも霜満天と
作りなるにと同じく物よりて霜の置くしきにすごき

これしきのみちをとりて大内の事を鵲の橋といひ
霜の置へきをしきを志ろきといへるかやうにさうくとたし
かにいへるが一首の趣向にてさくといへり此説契沖が説
似て今すこしわかりやすく此説によるへしれいとあらむ

## 安倍仲麿

古今羈旅、もろこしにて月をよみ侍る　左注

此哥はむかし仲まろをもろこしにものならはしに（学問させにとて）つかはしたりけるにあまたの年をへてえかへりまうで来ざりけるを此國より又使まかりいたりけるにたぐひてまうで来なんとて出たちけるに明州といふ所の海べにて

かの國の人馬のはなむけしけり
よるになりて月のいとおもしろくさし出たるを見て
よめるとなむかたりつたへたる

**天乃原**（天のはらとはひろくはるかなる詞にて天原とはいへり月の出たるは天のはらにて廣き事にてふりさけ見るとはふりあふぎて見る事をいひて下のさけ見るはなかめやりたる事也）**ふりさけ見れは** **春日なる**（春日とはひろき地名にて大名）**三笠の山に**（三笠山はその中にある地名にて小名）**出し月かも**

（仲丸いまもろこしにありてそのくにの空にてもいつも見なれし三笠山から出し月と思ひなりと）

一首の意は大そらを見わたせば海の中から面白く月が出し其月を見たるに是れは海の中から出し月なれど我くにて春日にある三笠山から出しその月も同じ月と思ふらむ大和にては山のかたに見しを明州にては限りなき海辺にて

一体のこまかなる花も月までもおなしかゝぬやうまてめてたき趣

喜撰法師　古今 雑下　題しらす

わか庵ハ都のたつミ　宇治ハ京より辰巳の方なり　しかそすむ　しかはてすむ

世をうち山と　世の中をうきをいひかけたり　人ハいふなり　一首の心ハ

我庵ハ都の辰巳の宇治山にてしつかに隠遁してすめる世

の中に何もうきこともなきをうき世そと人ハいふと云

ふなるへし　又我庵ハ都の辰巳の宇治山にしつかに引こもりて

住てある世の中を憂きものに思ひて隠遁しぬると人ハいふ

とよめるもあるへし　詞つかひのかすかにてたしかに聞えぬ所とも

古今序に此人の哥を判して始をはりたしかならすといへるも此哥なとにや

小野小町　古今 春下　題しらす

花のいろハうつり　花のことを姿をいふ也 此一首ハ花の面にことつけて よせて我かたちの老衰せしをなけきたるなり　にけりな　此なハ嘆息の詞とてよきあしき共に心に切に思ふ時にあいきをつけ声也

今もうつりにけるかなア もうつりにけりなアといふなり　いたつらに　何一つの思ひもなくむなしくと也

なとの如くなハ詞とも云あり

我身世にふる　世の中にふるてなる也 ふるハ年のよる也 ふるハ経る也 ながめ　長雨もひとつハおの方なるあめ

て花の年ふる給ふから川とりとしてある

といふあり是をこさてよめるを見よ

せしまに　一首の心ハ何ことをしてこそ

おもひてもなくむなしく年比よるをおもひなけきてうつりとしてゐる

うちに花のやうなる盛りの姿もうつろひ果たることよとなけ

けきつる哥なり　三四五一二とつゝけきたり　此歌花ハ一首見るまても題ハ

述懐也　古今集にハ春の部にいれたり にてなつ花と思も

こゝは強説（コヒコト）なり

**蝉丸** 後撰 雑一

逢坂の関に庵室をつくりて住侍るに行かふ人を見て

**これやこの** これは彼これといふ詞也　**ゆくもかへるも**

**わかれては** 関をとめれは別のかなしみあると云詞也

**しるもしらぬも**　**あふ坂の関**

一首の心は都を出て行人も旅より帰る人も知る人も知らぬ人もみなこの関にてあふといふ名のこゝろなり

**参議篁** 古今 羇旅

おきの国へなかされける時舟にのりて出たつとて京なる人のもとにつかはしける

**わたの原** 海のこと也　**八十島かけて**

**こきいてぬと人にはつけよ**　**あまのつり舟**

一首の心は京の我家の人に告てくれよと也

**僧正遍昭** 古今 雑上 五節の舞姫を見てよめる

[illegible]

**天津風** つい休はとてとをるく　てを[illegible]
[illegible]

**あをとちよ** そらふく風よ　雲はうちにあるなかちに
[illegible]

**たかしこめむ** 一首のさいそうふく風よ　雲はうちにあるなかちに
[illegible]
天へうてあらうそをもをもしなりともをもうとこ　たか
[illegible]

**陽成院** 後撰 巻三 **物ねのみたる** 光孝天皇　女御は親王物及ひと云
みことは男女ふりきこえ　親王をきこえてやし

たくそねたれ　[illegible]　**峰よりわたつるみ**
なれ河のめくりよりふ　[illegible]　**高そ**　[illegible]
[illegible]　一首おさいつ　[illegible]
[illegible]

**河原左大臣** 古今 巻四 **頭ちうら文**

**陸奥の** [illegible] 信文邦 **ちすす** [illegible]
[illegible]

**袖** [illegible]　**みれ初**
[illegible]

一首のこゝろは人のこゝろをたねとしてあらゆる万の言葉とぞなれりけるかの花鳥風月を見聞きふれてなにとなく心に思ふことを見るものにつけてもいひ出るなり

古今集序に歌の道は天地開けはじまりぬるときよりおこれりとあるこゝろは人ありて世に歌あるにあらず天地の間に人ありてこれを歌ふなり

光孝天皇 古今 春上 仁和のみかどみこたちにおはしましける時に

君がため春の野に出て若菜つむわが衣手に雪は降りつゝ

一首の意は春の野に出てとあるこゝろは若菜を摘むとて袖に雪を降らせて来たりて雪の降るなり

中納言行平 古今 雜 立ちわかれいなばの山の峰に生ふまつとしきかばいまかへりこむ

一首の意は立わかれて因幡へゆくとも松をまつとなら聞かば立ちかへりこむとの意なり

在原業平朝臣 古今 恋 二條后の宮の東の方に住みけるを内侍のかみの通ひ侍りけるを夜ふけて人しづまりなんとおもふほどに女のもとにまかりけるを月のおもしろかりけるを見てよめる

月やあらぬ春は昔の春にあらぬわが身一つはもとの身にして

一首の意は月やあらぬ春は昔の春にあらぬとは東宮の休見ぬ月にあらぬ春にあらぬ我身一つはもとの身にして

在原業平朝臣 伊勢物語 東宮の休見ぬ月にあらぬ春にあらぬ我身一つはもとの身にして

竜田川に紅葉流れたるを見て

ちはやぶる神代も聞かず竜田川からくれなゐに水くくるとは

一首の意は竜田川に紅葉流れたるを見てよめる

ちはやふる 枕詞 神代も 水代 もしきくすむ 竜田川くれなゐに
[illegible]
くくるとは 紡布をくくりそめて [illegible] 一首の意は
[illegible] 神代よりきくもあるなと
[illegible]
[illegible]

藤原敏行朝臣 たかゆき 寛平年中きさいの宮の歌合のうた
[illegible] よるべき 波 [illegible]
[illegible] 人めよくらむ
[illegible]

らしあれば [illegible] 人めを
よるべき [illegible] 人めをよくらむ
て [illegible]

伊勢 [illegible] 一
[illegible]
[illegible] 世をすくすとや いひ
[illegible]

元良親王 後撰 [illegible] 身いてきて [illegible]
[illegible]

京極御息

[illegible]

**羅波**　ある船ふなびと　漂漂の意

みをはてて　漂漂　松浦の

あもむとて思　一首のこゝろは事敗して

[illegible]

**素性法師**　たかき　高比

今来むと今は俗よ遅生と　いつもあるなり

いひしばかりを長月の有明の

月をまちいでたる　待いて侍る　一首のこゝろは

[illegible]

いひてはこゝろをうつして　[illegible]

つひに来ぬ人を待つひもなりけり

**文屋康秀**　たかひら　枝下

吹ばこそ　[illegible]

**是貞の親王の家の歌合**

**妹の家**　[illegible]

**木のしたもみぢ**　[illegible]

**うゑ**　[illegible]

**山の紅葉**　[illegible]

**いろん**　一首のこゝろは山をかくしてまた姫の家の

[illegible]

[illegible]

大江千里 古今秋上 是貞のみこの家の歌合によめる

月みれはちゝにものこそ 千々とはちゞにちゞと申して ちゞの心とは一つ二つのつゞきにてかぞふる詞なり

悲しけれ我身ひとつの 一身一身よりみて千と一ゝを上下におもひ知り 秋にはあらねと

一首の心は月をみれは心のちゞにもくだけていろいろと物思ひ我身ひとつ

より身いふもなし 詠もみなしるかなにより己にて秋にはあらねと

菅家 古今羇旅 朱雀院の 宇多天皇御位をゆづらせ給ひて朱雀院におはしましける時

ましける時 手向山 地名也 山のかみにたむけのするなり

此たびは 此度は旅の羇 ぬさもとりあへず ぬさは旅行の人の途中の山にて神に手向る物なり

あへず とりあへず 手むけ山 山のかみのたむけをこれにそふなり もみぢの

錦神のまにまに 神のみ心のまゝにまかせて手向くる也 一首の心は此たびは

此度は院の御供にて幣をとりあへずして手向山のもみぢ葉のにしきを手向とす神のみ心のまにまにうけ給へとなり

三條右大臣 後撰恋三 女のもとにつかはしける

名にしおはゞ 名におひてとは名のある事也 あふ坂山のさねかづら 逢とは男女のあふ事也

人にしられで 逢坂山のさねかづらをくるに人に知られてくる事もがな

一首の心は名にしおはゞさねかづらをくるよしもがな

貞信公 拾遺雑秋 亭子院 宇多天皇御位をおりさせ給ひて亭子院にわたらせ給ひける時

大井川より出幸　當代の天子代ありきを出幸とぶ　行幸とぶ　仙洞の出幸もありぬべき所なりと天子もまゐりあてはおはしまさせたまふ　ありて

に院のまゐりたまふ　おとれより　参せむとやとて

をくる山津　おとみちはりもみちをとめのひ　心あるべし　情あるべし　てんあるべんて

なるべき俗よりはるかにやうとて　今うてひれ　ものさきこなむ　待合せてちまま

いまのあてはのうく　一首の言葉のもみちよ　汐もなひりけあるものなるべし　今院の出

幸ありて行幸もありぬべきかと　作り出れたその由を　参ゆく

せたまふあて天子も見給ひ　まゐりぬべきかとに　今一度まゐるべきのあるを

待あまをちぬべきにせたまふ

中納言家輔　法橋高子

かもとくつかへる

みるに京わきて　源氏の流のなるべし　いにしへ川　いつとも所をうつみて　所とす

いにしへをとてもいつもとのあるとそ　ものきのくるあるをもとり　高くなるまも　一首に

をいまちくくと　人をまつるなるべし　なるまはあるべきにて　ものあるべ

家の川みるなるべ　一度もまゐるべきにて　高きにまゐるべきなり

源宗于朝臣　古今　冬の

山ちとは　冬そ　ちとは　さ　増りける人　あ　人　あ　人　あ　冬

もるれなと　一首の言　山里の人　いよ　こひ　来　家

いよ　高　冬は　松　さ　ち　ち　ち

元河内　新勅撰　拾遺　拾下　高

あて　小俗　あて　拾遺　とも　おむ　むを　こと　あ　せ　ぬ　こと　数ひ　その数の家の者

初春の比、立まとはせる所に、神垣の内に立て花と
見まがふるを、見て、家のうしろ、いとなつかしう
と思ふ家と見つけねとあて推量にはあらねど、思ふて
おなじ心なるべしとて、せうとをつれて、
立寄て、

壬生忠岑　たゞみね　ちなみ　歌

有明の月　つれなく　俗にまんまるの月のあらうずきと一説あり　見えし　有明の月の
月よりのこれる山もなくて、秋はさやかに見えしかど　暁もう
うきあはぬ　一首のを、有明の月の残りなきまで、
あきかぜにたえぬ雲のうすくのみ　おもてもまさる秋の
思ひかな　うきあはぬ　又とないとおもふとく

坂上是則　たゞのり　大和國　よしの山　雪　降る　ことよめる
朝ぼらけ　有明の月　在明の月とみるまで　月ゆえ雪とみるまで
ありあけの　俗にまんまるの月のあるとき
里　一首のを、朝ぼらけ　ありあけの
春道列樹　はるみちのつらき　志賀山越　よしてよめる
山かぜに　風　たゞよる　春　みなの川　あくあ
紅葉　なり　高し　一首のを、風　川　春　みなの川
いかだ　紅葉　なり　高し　なり　高し　みなの川
ひさしの間　ひさしの間　ひさしの間　みなの川
紀友則　とものり　ちるを　花の　ちるを

久かたの 枕詞なりこれにてはよまれたる 天の事をさしていへる ひかり 久かたのひかりとハ陽の天光をさしていふ ほしくて何とおもき事のなきさまをいふ

のどけき 俗にゆつたりとしたと云詞也 あかり晴るるさまをいふ 春の日に志川心なく しづかなる

なく心 俗気せずし そそくさとしたといふ心なり 花のちるらむ 一首の心ハのどかなる春の日ハせし 風ハ

ふかぬ空のけしきにゆつたりとしたる春の日に何ゆへ花ハ気せわしくちる

らんとうらみたる心なるべし

藤原興風 古今 雑上

誰をかも知る人にせむ しる人とハ友だちの事なり 詞をかへて出だしたまへり 高砂の松

高砂ハ山の事なり今の世の高砂ハ名所にてよまれたり も むかし友 俗にむかしなじみといふ心なり ならなくに

一首の心ハ諸をなくしてさびしくして友をせし同年くらゐの

人ハミな死して今の世で久しい山おりハむかふの山の松なれハそれも我と年

なければむかしなじみといふてもないぞと

紀貫之 古今 春上 初瀬に詣づるごとに宿りける人の家に久しく宿らで程へて後に至れりければ かの家のあるじ かくさだかになむ宿りハあると 言ひ出だして侍りければ そこに立てりける 梅の花を折りてよめる

人はいさ 俗にさうであらうといふ言葉也 心も知らず 人の心のかはりしか知らぬ ふるさとは 花ぞむかしの香ににほひける

一首の心ハあるじはいかにかはりしやらん

[illegible]

昔の宿といひつるかたらへと言しこ

清原深養父　古今集　月のあかりうちうちの秋時雨

夏の秋たつ雲なのうちなのめ

雲はいつくよりか月やでるらん　一首のこゝろ夏の秋はいまだ雲なの

のなかの秋のあるかぜ月の山のそこへ入まもなくまいり雲はこの

あるやうにて月をうくるやうなんと秋の短きをなげ

きあるとこゝろ山へ入て月をもてうるおぼるやうにひかり

文屋朝康　後撰　雜中　延喜廿年　秋

ちるあるよ風の音

の野ハ法くぬきとめぬ玉ぬきとめぬ玉ハ糸の玉を云ふ　もちなくつ

あまさ海ちをたれるうんちをちり　ちりなる一首のこゝろ野ハ秋の草花の色ハ雨露にぬれて

風ふくにつれて吹てちれを糸つゝぬくとする玉をえつゝぬきを

ふせもぬきもなく数みて中ふるとゝ

右近　拾遺　恋四　頼しるまつ

わすれてハ我身の上をなげ　我身の上をなげ　年をへハ　ちりひて

人の命ハ　一首のこゝろ　我をもてなしてハ

あきらめて何ともなくとも命をうけてわすれまいとおもひ

年なれたる人の命のあるまいをしきるなげ

兼盛等　後撰　恋一　人まつ

浅茅生の小野の篠原しのぶれど あまりてなどか人の恋しき

一首の意ハ恋をするとて年久しく人の目に立てバ大事なれバ つゝみかくさうとすれども つゝみあまりて なとか人の恋しきぞと也

平兼盛　拾遺恋一

天暦御時歌合

しのぶれど色に出にけり我恋ハ ものや思ふと人のとふまで

一首の意ハ我恋をしのびてつゝみかくせども色に出てあらはれ 人がものおもふかと問ふまでになりたると也

壬生忠見　拾遺恋一

天暦御時歌合

恋すてふ我名はまだき立にけり 人しれずこそ思ひそめしか

一首の意ハ我恋をいまだ人にもしらせず思ひそめしに はやくも世上の人がいひたてゝしまつたと也

清原元輔　後拾遺恋四

契りきなかたみに袖をしぼりつゝ 末の松山浪こさじとは

一首の意ハ末の松山を浪のこさぬごとく 心がはりハせじと契りし事をいひたる也

未だ松山に居ぐすも去りがまいさあ張り心ぐりせぬと契約しる
事てあつたりなり それを去年てもあらぬ事せ事とと

中納言敦忠　拾遺 恋二　題しらず

あひみてのむなしきなかにさきまさりあるを木
もたけりけり　一そのそいはなさりしかとたをうへてさなくば
たあるまいとおもひしよさそてもなりて年をへてこれこの歌
をあそぬむなしよつくべてしんそたあそぬむなしたはのすひら
なるなしに事とおもたりとと

中納言朝忠　拾遺 恋一　天暦の御時の歌合よ

あふ事のさえてしなくハとしハ体字に中ハ　俗ふるくとも花
ふあるを五月雨の能

人ゆも分を毎うゝみたゝまし　一首のそのうゝ婦
〳〵よ毎るのて心あさきを人をうゝみてう数をもあるを振ふ
すそてうゝ〳〵ふ〳〵ふもあそれぬいとなゝもゆりのあるゆて
なそひとおもひあきゝめて人をも分をもうゝみたたゝきと
そハ云ゝさうゝめしされあり上て俗よすて何いふあ

謙德公　あいひ侍る女ゆなつれなゝ俗てけゝ
ふ以ふとあるをくけゝよとふ何ハふてひと
ふ以ふゝちくて俗語ふふとそ見ろう　あそ所侍るれも

あそれとも　あそ見たくるし今もふ、やそたゝたなしふゝハやそ
と大島たくるし
まねゝちこれしその大島を侍の語すてあきあしきう川き侍ちゆ
ろ何すそも知ふよ毎のふをあれといふこそハハやかを思ふるとと子を
他き人を相ちふこ所ゝ侍ふ所ハ侍ふ

分のゝつゝよ　侍ハ俗よ

[illegible]

なりぬべきさうなり　一首さいあまり女房

[illegible]

[illegible]

曽根好忠　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

恵慶法師　拾遺　秋

[illegible]

人〳〵よりこと伝へなりける宿の淋しさ

八重葎　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

源重之　初花　高上

冷泉院東宮と申しける時百首の歌の中に

風をいたみ岩うつ波のおのれのみくだけてものを思ふころかな

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大中臣能宣朝臣

詞花 恋 題しらず

御垣守 大内の御まへをまもりし 衛士のたく火の 衛士とハ諸国より上りたる兵士ありて よるハもえて ひるハきえつゝ 物をこそ思へ

一首の意ハよるハもえ昼ハきえつゝ物をおもふと也

藤原義孝 後拾遺 恋二

君かためをしからさりし命さへ なかくもかなと思ひけるかな

とかくある哉 一首の意ハ君かためにハ命もをしからすと思ひしかとあひみてハ末長くあれかしと思ひしとなり

藤原實方朝臣 後拾遺 恋一

かくとたにえやハいふきのさしも草 さしもしらしなもゆる思ひを

一首の意ハせめてかくとたにいひやらんとおもひしと也

右大将道綱母　入道摂政まろうじうの女

門をあけさせ給へりしかとも

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ものをれいつひまれるとてあらうよ今日を命の限よ
して仕まつて弱りぬるもの多あれど一日を忘れ給ふ所ゆゑ

大納言公任　千載 雜上　滋藤の大僧寺おまりて人〳〵
歌よみて侍るに

滋の相とかゝえて久〳〵しくなりぬれと名をそ大そう滋藤
世に世にてしく
名子そく　なをれて　緑布りて　滋の孫の詞　れてまりき　きさ名れ　するきし
きこの孫のこと

一条院北の大政大臣殿のありし五月雨の頃滋今
丸　元
名ハ川ゆうまきてゆゑ世上よ名ゆうり滋のゆゑ

和泉式部　後拾遺 哀三　心地悪いなる時侍る所にて
人の

もとにつかはしける

あるたちん世ちのの世のの生といへる
ちりてはなのるちり世北の世のの生のるちり
ちりしあるよあるくさる　七日ひとりの北あり年もの一
首れをうるうる所をまう相りてとても命あるまれで
みれ世ちをぬるなりて侍まてのあひ人くさに今一度あひる
るもうあるまうしと

紫式部　新古今 雜上　もゆくよりてさうこ八友しちみて
侍る人北年ころ人て訪あひるう人をさる友ちてあり
途中てあいるし　かのうすて　俗ちとすまもをうり　七月十よ日の
あ流　月八の
月まきをひて物をれすて　いりぬさきよ必れよ物へくるといひすの

めくりの月の詠　あひてみ　やそ五十と　とうめ
ま小雲ゝ　ふれよ　（空ゝとのを　ふらしなふを　雨ふれと　ふる雨の月の山へ　ゝとのを　ふこ）　釈迦月

一首はなを　推なみ　てあつ　人よ　遠中　てあつて　人ゝ　ゝ人

てゝなりとまぶはきゝと　ゝ　ゝ　ゝ

武蔵国侍　金葉 雜上

和泉式部　武蔵の国の人　保昌の妻　後の夫

して行てしれ丹後国よりみやこに帰る人あり

つたなき小式部内侍

侍るを中納言定頼侍

きゝ奇ハいゝ　せさ笑ひ

人ハつゝ　ハ　ハ　ハ

[illegible]

清水納言　後拾遺 詠二

清水納言のもとにまうでおはせしに　円のはなおもしろきよしなどいひしかばよみ侍りける　大納言行成卿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]て侍る百人の歌に 前子内親王 [illegible]

[illegible]てうせにける年を 松の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]ともにあそばせてこしいとうやなぎ 花とり 山ちかく 花より
[illegible]りかの方へ まな [illegible] 一首のさいハアなるらしい花よ
と我を相手ふに何と我とも[illegible]なるらしい人と思ひ山
ちかくよりの[illegible]の美山て伺ひ[illegible]れ[illegible]相なるとも花ちるぎ
といふを何をうるるとうとし

## 周防内侍 千載 新一

きはちらきはうり月ちき秋二條院
[illegible]あまさかあるとして何ゐるとうり
周防内侍よりふしてあ今撰ふるとふるのうて 枕ふう
なと志のひやうふをきてて大納言家光を枕
[illegible]ひな[illegible]屏の下ちかちかて伺ひ[illegible]て伺ひ[illegible]を[illegible]

春の秋は短きあはれ 夏は[illegible]なるを[illegible]ま[illegible]ふ[illegible]なく
時をうしなふ[illegible]む名を[illegible]を[illegible] 一首は秋を短き秋と夏とは
[illegible]ちるを[illegible]
[illegible]

## 三條院 拾遺 新上

[illegible]倒る[illegible]おい[illegible]ます[illegible]て[illegible]
[illegible]
[illegible]月のあ[illegible]
[illegible]て[illegible]
心[illegible]て[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

能因法師 後拾遺 妹下 永承四年内裏歌合

あしの間のみちをたのみて立ちかへるなりけりとこそ

一首の意は三笠山に紅葉をあらしてちらせる木は立田川

[illegible]

良暹法師 後拾遺 妹上

[illegible]

一首の意は妹の夕ぎりたちひしさに宿を立てんうらもなさも

あらうとてあるさこなるもれといつくもはし杖のうれの

[illegible]

大納言經信 金葉 秋

[illegible]

夕ぎりは[illegible]門田の稲葉をとふ[illegible]

小倉の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

祐子内親王家紀伊 金葉 恋下

[illegible]

堀河院御時歌合 [illegible]

のあま波いかのうらやきあぐ
ゆうをうたとゝ俗信
孫をひきまとといふをこし
袖の如くしてすがたをれ袖のぬるゝもあれぬるゝなきよのるく
袖のぬるゝも涙の孫の詞 一首の
意を無上にて義いあさ〳〵しいと侍制者人不孫能まい云も
はてはうちをうてあうこもきぬまと

控中納言通房 後拾遺春上

うぢのおかいまもち君の家よ
て人〳〵酒さ〳〵して奇よき侍るに遠よ山の内
をうたむといふさうちをとよある。

うぢ殿の尾上花 山のうてきをしたたる山の
尾をのるをこと〳〵美し 内〳〵咲よりり外〳〵
山のさうの咲〳〵尾上よりいこ
之山のいてきをこうさ〳〵咲者ようそのうさ山

ようすをうてを隔うれて見えをほあれをとこ卯山
をさえてこの花をれも歌のをとしてもじにをこ
源俊頼朝臣千載巻二 控中納言俊忠家に高十首の
奇よき侍る時いの是とも不通高とすて公通高相ちなく
をしれあいるさうを歌よある。
うう〳〵人をいかうしはあり〳〵れなりをこはは奇八和歌の
をこうり 山のうち〳〵人をとをこうりうう〳〵はは白八
ををしれをこ 初瀬の山おろ 山のうち八山をこ八わうを通は
でくうり 君の家ちふをこうう
ひしをれをとをはを〳〵ふおうをの孫のをを
しを〳〵ぬれを 一首のをこをせ
ねんやはあう〳〵れをいよ〳〵はを〳〵をれをとを
のりをせをり〳〵ものをいうこ

後鳥羽院　千載新上　信教光房　基俊の子なり　維摩会の講師

の講を無勝寺に始行せられて相続せりけるを法橋なりしその講師と信を已講と云て多くは法橋なりしを已講と云て法橋のことなりさて法師とつかうまつり官位をもとめたるをうらやましく中ごろ

法性寺入道前太政大臣　右通光公中山内府実国うみ中ごろ無勝寺は後京極殿のゆゑ年ゆゑ法師の講を実国ためちかと結ばれたるなりしなのちちかの中もてこれ世の中あるかぎりとあり

経もつ法師よせんとのみ　又その年もとられよりてつかうまつる

契りきー　口契約ありしの意　ちせもうつるを　ちかの家の祖なりしかばこれをさしていのちみて　我一命のかぎりなりとて　あもれ　そこはやと情を見せてさきまつりしことを

ことー　妹　ある人の妹　いぬあり　一首のこころ詠て

世を契りきりておもれて家世の中にあるかぎりたのみよせしことを信れ　ゆるされをうりを命のかぎりと思ひて祈りしこと

云清のさきはなくてうハヤ妹うれてかもく

法性寺入道前太政大臣　右通光公　新下　崇徳院位おはします

時海上遠国とて事をよせ　ねりるまとあるを

ゆるされ京はのひろきをさへ　さきい　なりまつりおきし川　ゆるされ　久しの　格別　ゆるされ

崇徳院　同花　兵上

御をはやく　御ものの　さまし　岩よ　せりて　流れの　きはなきをとして　ゆるされ

ゆるされて水のひろく事　事はの中　ある大宮　せりて　ゆるされて　ゆるされ　ゆるされ　ゆるされ

ゆるされ　ゆるされ　ゆるされ　ゆるされ　ゆるされ　ゆるされ　ゆるされ　ゆるされ

てもとしあつ間しくて絶えようようなる
紙後なる歌してとしとあるを
一首のこゝろは今てハうつる人の
紙後書写してもり来てつひにうゑあきとなりすとこ

源兼昌 金葉元 関路年月
あこ地潟あるうらなる
ねさあめる
すまの関もつる

一そのこゝろ

九京大夫顕輔 新古今 妹上 崇徳院
妹り者よ
もも

一首のこゝろ

待賢門院堀川 百首 年月付高の人よある

なのくらゐ 髪の根
髪のみ
なま

ふりもせぬこゝろをもとりうるなれそ松葉よりつけもさ
こゝろをこそみておをかりてとく

後徳大寺左大臣 千載 後 暁ゆ郭公
ほとゝきの

一首のこゝろ

押あけて

道因法師 千載 左三 題しらず

花もひろひ捨てもそれぞ命にあるものぞ残りすくなき一人のつるき

はしらぬ人えこそなけれ 一首のこころみな〳〵あれもしらひてもそれぞ命といふ物にこそ〳〵てたゝるものをなにの

つゝけるえこそ〳〵すてゝ居るものはなきこそとこ

皇大后宮大夫俊成 千載 雜中 述懐百首 寄世祝

世の中よ道にもまよふ人にとはばいざ言問はむ都鳥

みちすてゝ人にとはばいざ言問はむ都鳥

世の中よ道にもまよふ

戸のすきまより ちら人のつれなきつまとなりて 一首をこいあまりに
人のつれなさを 恨もすらむ あはれ思ひてこそ みるめ なりけれ
八月のあるあさて人のつれなきのこと 後拾遺の恋五のすきうるさく
つれなきこと

西行法師 千載 恋五 見ずとよ いかる恋をよめる

なげきとて 月やは物を 思はする かこちがほなる わが涙かな
てをねへ うち地 うわなる 自をうつ こつけてこのすがたにうつりかはる 我な
らぬ 一首のこと なげくといひて月をいとせうすう
さてありなりとて月をうそぶいてなきこと
和歌 月を 一首 とりつけ

寂蓮法師 新古今 恋下 五十首 前 そをつくる時

村雨の 露もまだ ひぬ 槙の葉に 霧たちのぼる 秋の夕暮
一首 よこ うれなし 深山の 夕暮 ありとたれ

白基 和門院別当 千載 恋三 摂政 長の時の家の前合に
旅宿 あはれ

雅経 江 北 堀 槙の 苔 ながら 秋の 前 恋 俗 恋
一 秋 ながら 一 四 よ 苔 の 秋 み 我 ぬ や 恋 の れ
雅 ぬ 月 け 月 を 月 を 立 き 月 月 を
立 ふ 立 ふ 立 ふ 一首 恋 雅 あ て 恋 一 秋 の ふ
八 の 秋 の 月 月

式子内親王 新古今 恋一 百首 前 七夕 恋

[illegible]

[illegible]

[illegible]

我神の沼干と見えぬ神の石の[illegible]
人こそ[illegible]ね人の[illegible]おふくゆきなし一首の
[illegible]沼干[illegible]
[illegible]人[illegible]
鎌倉右大臣 新勅撰 四結旅 歌枕源
世の中も[illegible]
法[illegible]延寿の小松の法なりて[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

加[illegible]なり婆[illegible]比[illegible]をとれりけるけをいひて風の
分すむけものはなもせ衣うつしひて[illegible]なり婆[illegible]をもせ
[illegible]ハ氣韻（ニホヒ）とふおもてしけもこそ[illegible]

## 前大僧正慈圓（千載 雜中）

大氣なるなくなくなきものをしどけ
ないをいふ同じ

おもかるとてんをおきつるふるすうきよの民
るて大機をいふことなり
憂きすの多きさの中といふて
こまてごてとこてをけり

おもかるなり

おもかるとてんをおきつるふるすうきよの民 社をおもふるすく天下の万民あまたい
のふあくきにあてしとて衣の袖をこ
おもかるなり

## 杣

比叡山をけたる法師の奇なものをいふ三
あくせぬとあるよりおもかるなり
いふをうれとは奇なるをいふ

## 基房の北て

二首のこと
大機なる万民あまたの社をおもひくる

年ふる世叡山よりまむ法師ハ[illegible]
ふとに仰年ありて天下安全の法行繁とし何法もあれ御門ぬ
時の奇なり或ハ殿上ふなり
ふひてなといふあてぬるく殿上人ハ
玉葉ハ穏を行ふ職なて天下万民へ[illegible]

行ものをうれとそれるくまこと

## 道前太政大臣（行事抄 殿上）

花ちるをふる

花ちるをふる　ちるを上下ふ
ふるを上下ふ
ふすて

物りゆく

物りゆく　物りゆくを此隆ふ我才の古りをうまり
ふのかりゆく年のよるすく

我才なる

我才なる　[illegible]

一首のこと

花の色なくて[illegible]
花ちるをふる
花ちるをふる
花の色なくて[illegible]

[illegible]

## 摂中納言定家 新勅撰 建保六年内裏歌合ニ 恋三

[illegible]

## 後二位家隆 新勅撰 寛元年女院内の屏風ニ

[illegible]

## 寄海辺恋

一首のさま[illegible]なる[illegible]の小川のなれるこゝろのかたちなる[illegible]なるべし[illegible]又按初二句風景すなはち小川とよめるを地名の楯の縁こそ[illegible]とあるべし楯の木を書てそれに風のそよぐよしよめる事[illegible]ときもちゐるべし地名の楯の縁なれとそ[illegible]なるべ[illegible]といはれいすこしことをかりなきを似られも世ことの[illegible]はいつき優美にて[illegible]の[illegible]ものの[illegible]ぬ[illegible]

今たゝえたりあくあ年一百や

後鳥羽院 隠岐御 在中

影さゝ沢

人もを

あちきなく

[illegible]

[illegible]

天下の政はんよりたゝ世の中あちきなく思ひたつ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

天人音ちゝきいかりきとゝまりをとこ女といまそかりをるきかと
ゝまを地なれて語りをるあはせて国のさを祥えむとをるゝと
歌よみいてむ彩とやむまいと侍あまをて初あまをひけんえ
ゝまをゝむ涅槃ゝひとはあゝまのわしきをちこちをるの孔雀
おとゝあをとをきいとはうなをちていふひをゝ中比のハ
うゝとなるいひてふをゝなる事のをなりて奥州を沖
改訳郡賀茂郡宮渕ゝうぬまをひとをゝあをんをゝ大をゝいをえ
ゝをなれと奥沖ゝをるきをつとめ訳ゝ孔雀渕ゝをゝ
きてをゝゝいてやみやひをゝををとを梨を今盛の常信こ
ゝをきををゝていをるきをうぬあまをひの侍をんをて今ゝあを
ゝ

ゝをゝ名不ゝのゝをよゝ化者の系図ををゝいをるゝひをゝ
ゝゝれと年ひゝゝす地名ゝをゝて中ゝゝ中をゝをゝひぬ
面ゝれをすゝてゝゝ来をてひゝをゝを歌のをゝをゝと梨を雑事
なむ郡郡をゝれるゝをゝを有名ゝて事ゝ川沖厚殿
ゝれあをゝをゝ名ゝの神事をゝりてゝの世のあゝれいと
西ゝきあてゝゝれと数ゝぬの郡ゝねを寺義寺北長
のゝをゝゝ名宗祇ゝ郡寺ををゝを塩ゝ表
改をゝ名ゝれゝをゝをゝ横の事の横(ハシ)を郡代寺
弘貫ゝ生をゝゝゝ

あたいとんでもきこえすてたりし鈴へきそのよあくまりこそ之又受
本なるもとも之へき年ふるとてひさしく朱墨よりあるべしてうるべし
のこ三四百年よりあるべしとあるべしとあるべしとうるべ
帯あるべしまたこのき改めたかこそやすしへ今のうへや
まてふるとりてなあしくめてきたはあるとあたら
たりとおこなれてあのうちよこそとりたのしむなるその年
ふ和あまるまひとたりたみへうへ力こてて紙文的の他まるむ
とすまんへうるしたみ

享和四年甲子四月　石原[illegible]正明

嘉永四年子皐月写之　杜年剛　枝写之